人間を人間として生かす仕事

坂口　亮

どういうわけかこんな大きな題をいただいてしまいました。私は整形外科医で、乳児、幼児を相手にすることが多いので、その接触のうちに子どもの心身の発育などについては何か意見があったら書いてごらん、という思し召しと解釈しました。本誌の対象読者は児童の教育にたずさわる方がほとんどと思われますので、私は素人らしくおくせず、日ごろ思うところを書き連ねてみます。

まず私の仕事の整形外科のことですが、これはご存知のように、骨や関節・筋肉、またこれを動かす神経系などの病気を対象とする専門科目で、交通事故のような救急的のものから、赤ん坊の先天性の病気、あるいは老人の関節痛、神経痛というように広い間口を持っています。私はその中でも特に乳児の先天性股関節脱臼の治療に専念する境遇になり、毎日毎日入れかわり立ちかわり多くの子どもに接し、私なりの体験を重ねています。この病気は、単に股関節のことだけでなく、広く子どもの治療という問題で私にいろいろのことを考えさせます。

われわれが整形外科に入門するとさっそくこの病気の治療を教わります。股関節がはずれているのですからはめてやらねばならない、大腿骨の骨頭は後のおしりのほうにはずれているので、それを前方へ引き出すように引張り、ゴリゴリッと股を直角に開くとはまるのですが、助手に骨盤をおさえてもらい、かなり力を入れなくてはなりません。そこで麻酔をかける必要も出て来ます。次に、そのようにしてはめられたものは、またすぐはずれてしまいますから、しっかりと保っておかなくてはなりません。それがギプス固定です。子どもは両方の股を直角に開き切った形でがっちりと固定されました。子ども、特に小さな赤ん坊相手にこんなゴリ押しのような治療をしたらいいわけがなく、脱臼ははめることができても、大てい骨がいたんでしまいます。成長すべき軟骨の部分

が、整復の操作で傷つけられたり、何ヵ月にもわたって石膏でがんじがらめにされるためとダメになってしまうのです。こういう不都合なことはわかっていても、脱臼を治すためにはやむを得ない、そのことを恐れて何もしなければ、一生股関節脱臼のためにビッコを引いていなくてはならない、というのが伝統的な考え方で、そのために整復法や固定法が整形外科医必修の技術として新人に教育されたわけです。

小さい子ども、特に赤ん坊はただ泣くだけで物がいえないのだから、こちらから心を鬼にしてでも、やるべきことをやっておいてやらなくてはならない。とに角はずれたままにしておけば必ずビッコになり不幸な目をみるのだから……とお定まりの整復操作とがんじがらめの固定、そしてその後のマッサージ通いが続けられました。先輩の先生方の、子どものためによかれと思うその善意に対してはみじんも疑う余地はありません。現に私の先生格に当る学識豊かで人格高潔な方方も深刻に悩みながら、そのような治療に努力したのですから……。しかし――結果はあまりにみじめでした。子どもは、脱臼は治してもらっても、成長がひどくゆがめられ、結局ビッコを引く、あるいは年ごろになると痛みが起こって病院通いしなくてはならない、というような事実が続出しました。もちろんそのような方法でもうまく治る子もいました。それが妙な支えのようなものになって、昔から長い間こんな治療法が繰り返されて来たといえましょう。それにしても、いくら善意によって脱臼を治すといっても、半数以上（大体六〇パーセント）の子が治療のために傷つけられるような方法がまかり通っていてよいものでしょうか。

チェコスロバキアのパブリクという人はおもしろい方法を考え出しました。一九五七年の発表ですから、まだ二十年もたっていません。それが日本にも輸入され、今では治療法の主流になっています。この方法は、単なるつり紐に過ぎず、両あしにそれをつけて、肩にかけ、ズボンつりのようにつっておくだけのものです。あしをまっすぐに伸ばすことはできませんが、それ以外の動作なら何でもできるようになっています。子どもにとって苦痛らしき苦痛はなく、（大体小さな赤ちゃんほど、股関節を曲げた形で動かすのが好きなようです。あしを頭のほうへ持ち上げてなめたりします）そのまま好きなようにさせておきますと、大てい一～二週のうちに、はずれていた股関節がはまってしまいます。不思議なことには、そのように脱臼がひとりでに整復されると、（注意深く見ていると、ある一とき泣いたりするようです）赤ちゃんはそのほうのあしをぺたっと開いたままほとんど動かさなくなります。反対側のいいほうのあしは少しもじっとしておらず、

いろいろな芸当を見せてくれるのに、脱臼がはまったばかりのあしはそっと加減している、その対照の妙に私はいつも感じ入ってしまいます。ここで私は、「不思議なことには」と書きました。今こういう事実をたびたび見ていれば何の不思議もないのですが、初めに書きましたような伝統的な治療の考え方からすると、これはとんでもない不思議なことなのです。脱臼がひとりでにはまって、しかもあしは自由に動かせるのに、またはずれたりはしない、こんなことはあり得るのでしょうか。到底あり得ないと思われたからこそ、力づくでもこちらからはめてやり、二度とはずれることがないように石膏でがんじがらめにしたのではありませんか。引続いてまだ不思議なことがあります。昔は、そのように、またはずれては大変とばかり、厳重に、確実に石膏で固めたにもかかわらず、その固定の中で再び脱臼してしまうというようなことがよくありました。（お前の固定の仕方はなっちゃいないと先輩に叱られ、またやり直しです。ゴリゴリッとはめて、今度はもっともっときっちりと固める――、子どもにとってはたまったものではありません）ところが、つり紐をつけているだけで自然にはまったものは、固定らしきことは少しもしなくても、子どもははずそうとしません。こんなことをみていますと、私は、「脱臼は、はめようはめようとするからはまらないのだ。また、はずすまいと厳重に固めるからかえってはずれてしまうのだ」といいたくなってしまうのです。もちろんあらゆる場合にそのまま単純な形で通用するわけではありませんが、基本的な考え方としては、過去から現在に至る変遷をみていると、それで間違いはないと思います。それが進歩というものでしょうか。ここでまた私は何とも奇異の感に襲われるのです。普通、医学の進歩といいますと、たとえばコンピューターの導入といったような複雑な機械化がすぐ頭に浮かぶのですが、今問題にしている子供の股関節脱臼では、全くそれの逆行ともいえる簡素化です。つまり大げさな方法で何とでも治してやるという昔の方式から、ごく簡単なつり紐で、子どもが自分から治っていくという、ただそれだけのことが大変な進歩なのです。つり紐はただの紐で、特別新しい材料を使うわけでなく、何百年前であっても作れたものです。こうしてみると、何でも進歩々々と新しいものを追って知らない間に自然をこわし、みずから招いた公害にアップアップしているわれわれは、一撃をくったように考え込まされてしまいますし、また多少そんなことに気づいた者としては少々愉快な気持ちにもなります。

なぜそのようにつまらないことに気付かなかったのだろうか？　というのもひとつの問題です。一口にいえば盲点とい

うべきものなのでしょう。医者は、とくに専門の整形外科医ともなれば、脱臼をみたらまずはめてやらなくてはならない、はめたらはずれないように固めなくてはならない、という一見自然な発想と思考過程で、それを絶対的のものとして疑いを持ちません。そういう固定観念に心を占められていますと、「脱臼は何もこちらからはめてやらなくても自分からはまるさ、何もがっちり固めなくても子どもははずしゃしないさ」というような考え方ははいり込む余地がありません。医者は自分で勝手な病像をかがき、勉強努力といえば、早く先輩のその考え方を身につけることで、やっているうちに何かわかって来たような気持ちになりました。ちょうどアンデルセンの「裸の王様」に登場する、バカに見られたくないため努力する大臣や家来どもと共通するものがあります。つり紐の方法を発見工夫したパブリクは、さしづめとらわれることのない「子どもの眼」を持っていたといえましょうか。「裸の王様」は単なる童話ではなく、われわれが日常ひとつの観念にとらわれている時、それが自然科学的の教義にせよ、あるいは何かイデオロギーであるにせよ、真実を見る眼を失いがちになることを痛いほど見せつけます。

小さな赤ん坊でも、つらい、苦しい、痛い、快い、うれしい等々、それなりに物をいっています。治療の教義よりも優先してそれを聞こうとする態度があれば、もっとずっと早くよい方法が生まれたに違いありません。初めから、子どもは何もわからないから、と決めこんで医者がこうすればよいはずとことを運んでいったところに失敗があったというよりほかありません。もちろんその善意は十分認めますが……。

ちょっと紹介だけのつもりで始めたものが、やはり仕事の話となるとつい長談義になってしまいました。お許し下さい。ただ、子ども、小さい子どもに接していると、何も医者の治療に限ったことではなく、いろいろの面で共通することがあるのではないでしょうか。

私は先天性股関節脱臼の治療で得られた教訓をいつも頭におき、とくに子どもの病気では、何を欲し、何をきらうか、またきらうといっても一時的のもので、次の段階では喜ぶか、さまざまの程度、ニュアンスを先に考え、それに定められた治療方式がマッチするかどうかを考えながら治療するように心がけております。

（整肢養護園）